Against The Dark

加藤ヨシキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｇａｉｎｓｔ　Ｔｈｅ　Ｄａｒｋ

【Ｎコード】
Ｎ１７７６Ｔ

【作者名】
加藤ヨシキ

【あらすじ】
県内の公立高校に通う高校生二年生、沖和也。人付き合いが苦手な沖は、クラスになじめず、いつも一人でいた。同級生達も彼を「異分子」として避けていた。ある時、沖は後輩の女子・川上裕子と出会う。成り行きで仲良くなる内に、沖は自分が少しずつ変わっていく事に戸惑う。初めて触れる友情、そして…。
しかし、平和な日々は長くは続かなかった。川上はある事件に巻き込まれて、誘拐されてしまう。初めての出来た大切な人を助け出す為に、沖は行動を開始する。そう、彼は特別な「技術」を持ってい

たのだ。

罪科？

【序章】

悲鳴など、届く筈も無かった。あの空間からは。

そのマンションは異常だった。十三階建ての巨大なそれは、山の中腹にそびえ立っていた。夕方ともなれば、木々は夕日に照らされ真っ赤に染まる。そうなると、周囲を森に囲まれたそのマンションは、まるで赤い海に沈む巨大な墓石のようにも見えた。
無人の廃墟のように見えたが、その全ての部屋に人が住んでいた。家族連れ、老人、若者、ゲイのカップル、あらゆるタイプの人間がいた。
築十年ほどになるが、壁面はまるで新築のように美しい。手入れは行き届いていた。正面玄関はオートロックで、これは建設当時としては最新の設備だ。「ヴァルハラ」という煌びやかな、そして悪趣味で幾何学的な装飾が施されたレリーフが目を引く。
全てにおいてごく平凡な、むしろ綺麗なマンションだった。
しかし、その周囲には何も無かった。コンビニエンスストアやスーパーマーケットは勿論の事、民家や街灯すら無い。夜には完全な暗闇に包まれる。おまけに、そのマンションに行くには、細い山道を通って行かなければならない。車一台が通れる程度だ。交通の便は最悪だ。
当然ながら、そんなマンションには誰も近付かない。そのマンションに住む人々以外は。
周辺の住民たちは、この不気味な建造物と、そこに住む人々を恐れていた。何か実害が出たわけではない。ただ単純に「気味が悪い」と嫌っていた。
周囲の住人の何人かは、そのマンションに住む人々の異常な生活習

慣に気が付いていた。
季節を問わず、十八時キッカリに、そのマンションの全ての部屋に電気が同時に点く。まるでマスゲームのように。そして二十一時、今度は全ての部屋が同時に電気を消す。朝八時、ピカピカに磨かれたワゴン車が数台、決まった時間に山道を降りていく。窓にはスモークが貼られ、その中を覗く事は出来ない。そして十五時、またも決まった時間にワゴン車が山道を登って行く。
「あのマンションにはどんな人が住んでいるのか？」
時に小学生や中学生が、根性試しと称してマンションへ向かう事があった。しかし、彼らの多くは細く険しい山道に屈し、途中で引き返してしまう。マンションに侵入した者もいたが、大概は「住民に怒られて」帰ってくるだけだった。そういう時、侵入者を叱る住民は優しく、ニコニコと笑うごく平凡な大人だったと言う。中には「住民が幽霊だった」「住民が人を食っていた」などと言う者もいたが、そんな事を本気で信じる奴はいなかった。ほんの一時、話を聞いた同級生らに冗談半分で怖がられ、ひとしきり騒いだ後にきれいさっぱり消化されてしまった。
一人だけ「非常階段に巨大な南京錠がかけられていた」と証言する者がいたが、怪談めいた話題に興味を持つ小・中学生にとって、そんなモノは地味過ぎて話題にもならなかった。それが事実だったとしても。
マンションの周囲に住む大人たちは恐れつつも、さわらぬ神にたたりなし、そこにそれが存在しないようにふるまう事で、変わらぬ日常を送っていた。
彼らがマンションで何が起きていたのかを知るのは、二〇〇三年七月二〇日の事だった。

罪科？

―あの時、あのマンションで何が起こったのか？
フリーライターの中島和樹氏が一連の“事件”についてまとめたルポ「神の子らの遊戯～レーラズ教団監禁殺人全記録～」は、その総括をこう書き出している。

「残酷―この一連の事件は全て、この一言で言い表す事が出来ます。この日本と言う国、いえ、人と呼ばれる種族が住む、全ての土地において、決して許容されてはならない事が行われたのです」

事件が発覚したのは、偶然であったか必然であったか、それは誰にも分からない。ただ事実だけを言うなら、それは偶然として処理されている。
入口に「ヴァルハラ」と掲げられた、あのマンションが燃えたのだ。周囲は深い森である。延焼すれば一大事だ。通報したのは周囲の住民の誰かであったと言うが、その実名については明かされていない。消防団は狭い道を進み、通報から数十分後には現場に入っていた。しかし、そこで彼らが見たのは通常の火災現場とは全く異なる光景だった。
再び中島氏の本から引用しよう。彼は、この際に現場に駆け付けた消防士にインタビューを行っている。

―あなたはあの現場で何を見たのですか？（※著者注・中島氏）
「俺が見たんは、ありゃ…、酷かったんだ。炎がごうごうと燃えてて よ。もう手が付けられなかったんだ。あーこりゃ上の階の連中は助からねェな、避難してりゃいいなって、仲間も分かってたんだよ。それなりに経験があったから。でも、すぐに『あれ？』ってなったんだよ。ありゃー確か隊長の田岡さんが気が付いたんだよな。『人

がいねぇ』って。」
―それはどういう事ですか？
「そのまんまの意味だよ。誰もいねぇんだよ。山ん中だったから、ガヤ（※野次馬の事）がいねぇのはアレだとして、逃げ出した感じの連中がいなかったんだ。で、まずは『このマンションの連中は変な連中だから、マンションに火を点けてみんな逃げ出したのか？』って。今になってみりゃ、そういう風に考える方がおかしいんだけどよ、でも、あん時はそういう風に考えたんだわ。だってよ、そうじゃなけりゃ…」
―しかし、実際はそうじゃなかったと
「そうなんだよ。まず気が付いたのは、さっき言った先輩の、田岡さんだよ。動きが止まってんだ。で、ぼうっと燃えてるマンションの、上の方を眺めてる。『何だよ』って思ってさ、俺も見たんだ。そしたら、窓にこう、顔が張り付いてんだよ。子供の顔だよ。男の子だった。口を必死でパクパクさせててよ、ありゃー何度か見たことがあったから分かるぜ。『あつい』って言ってたんだ。ずーとよ。で、俺らも『大変だ、早く助けなきゃ』って思うんだけど、そいつがいたのは十階か、それくらいだった」
―…
「そういう光景に出くわすのって珍しくはねぇんだけど、やっぱ嫌なもんだよ。そういう時はなるべく助けられる奴を助けようって、みんなそう思うんだ。一人でも助けりゃ、少しは楽になるんだよ。いやらしい話かもしれねぇけど。でも、その時は違ったな。子供が燃えてくのを見てよ、みんな黙ったんだ。そしたら、こう、悲鳴が聞こえてくるんだな。もう、『あつい』『あつい』って、炎のごうごうって音に呑まれそうだったけどよ、マンションの上の方から降ってくるみてぇに、声がしてんだよ。あの時『もうダメだ』と思ったね。すぐに分かったんだよ。上の階に人が集まって、炎に包まれてんだって」

あるコミュニティーが集団自殺に走るというのは、決して珍しい事ではない。一九九三年、アメリカのブランチ・ダビディアンという新興宗教組織の例もある。彼らは自分達が神に選ばれた人間であると考え、黙示録的大戦争に備えて銃火器類で武装していた。遂に警察による強制捜査が行われるが、彼らはこれに抵抗した。特殊部隊が彼らの籠城する施設に突入したが、最終的には教祖らは自決してしまった。

このマンションを管理していたのは“レーラズ”と名乗る団体だった。彼らはキリスト教系の新興宗教組織で、信者から回収した金を基に、マンションを建設、集団生活を行っていたのだ。レーラスはキリスト教を名乗っていたが、その実態はキリスト教とは何の関係も無いものだった（精々十字架を飾っていた程度）。集団生活を始める以前は、全国に数か所の支部を設置、そこに信者を集めていたと言う。新興宗教ブームと言われた九十年代には最盛期を迎え、信者数は軽く二千を突破した。

こういった団体が集団生活を行う事が、決して珍しい事ではない。彼らが特異だったのは、その集団生活の内容にある。集団焼身自殺は、最初こそワイドショーの恰好のネタとなった。しかし、警察の捜査が進むにつれ、それは公共の放送に耐え得るものではなくなっていった。

罪科？

それが発見されたのは偶然であった。これは事実であり、真実だ。ワイドショーのリポーターを務める“自称”記者が―実際は使いっ走りのアシスタントディレクターが―黒焦げになった巨大な炭の塔から、それを発見した。事件現場は警察が警備していたが、手抜かりなど幾らでもあった。少々のお礼をすれば、時には正面からも入れる。そして見つけた物は“独自のルートで手に入れた”と紹介される。

彼らが焼け跡から見つけたのは、一冊の大学ノートだった。Ａ５サイズのそれは、極々平凡な、コンビニエンスストアで手に入るものだ。

その中には見開きで表が書かれていた。木の根が幹に集約されるような形をした表、つまりはトーナメント表だ。

普通、トーナメント表というのは下から上に上がっていくにつれ、その数を減らしていくものである。しかし、このトーナメント評はそうではなかった。ノートを開いた際に一番下に頂点があった。あたかも幹から無数の枝が生えているように。

ノートの上部には日付がある。その日付を照らし合わせると、三か月に一度、新たなトーナメント表が書かれていた事が分かった。

トーナメント表には名前が書いてある。このノートを見つけた彼らは、ちょっとした探偵気分で推理を始め、やがて恐ろしく単純な真実に気が付く。

１月に開かれたトーナメント表では、『中川智香』という名前が王座にあった。副王座には『早川雅夫』という名前が書かれていた。

しかし、４月のトーナメント表には、『中川智香』という名前はなく、王座には『副島多恵』という名前があった。『早川雅夫』は一回戦で消えている。

ここで、彼らは一つの疑問を覚えた。

―何故、『中川智香』は消えたのか？
普通に考えれば、王になったから抜けたのだろう。しかし、では何故４月のトーナメントにいないのか？そして、１月に副王座にいた『早川雅夫』は、何故４月になると一回戦で消えたのか？番狂わせだろうか？その後のトーナメント表を見ても、『早川雅夫』は常に１～２回戦で離脱している。『最初の一回だけ運良く勝ち抜けられた』と考えるべきだろうか？
彼らが解答を得るのは、数日後の事だった。現場を調査していた警官が、大量の子供の遺体を発見したのである。それは、火災が起きたマンションから数百メートルの、森の中に、まるで無縁仏の様にまとまって埋葬されていたのだ。
そして、その中で最も古い『物』―発見時、殆ど白骨化していた―には、『中川智香』という名札が付着していた。
中島氏の本より引用しよう。

「この事件の最も陰惨な部分は、正にこの場所にあるのです。彼らが集団でガソリンを被って死んだ事も非常におぞましい事ではありますが、私個人の考えを述べるなら、彼らがマンションの中で平時に行っていた所業こそ、最も許されるべきではない事なのです。（中略）彼らは訓練を子供らに課していました。その一環として、ある儀式が行われていました。それがワイドショーでも取り上げられた、あのトーナメント表です。私が本当の意味で、この事件に戦慄したのは、あのトーナメント表に関する警察の調査結果を聞いた時です。彼らはマンション内にいる子供らに、負けた人間が勝ち上がるトーナメントへの参加を強制していたのです。子供らは一週間かけて戦い、ただ一人の敗北者を決定しました。そして、優勝者は殺されたのです。準優勝者の手によって」
警察が発見した優勝者の遺体は、四十三体に及んだ。遺体には名札が括り付けてあったという。それはまるで、牛や豚につける管理札

のようだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1776t/

Against The Dark

2011年5月22日10時14分発行